

山崎郷土叢書

No. 62

58.10.15

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話②2000

近世初頭の山崎藩 (二十)

島田 清

二、池田輝澄時代 (統十九)

○ 池田家の家中騒動 (6)

4. 騒動勃発の素地 (N)

― 新封予定の駿府城 ―

池田輝澄が山崎城七万石の主より駿府城十八万石の主に抜擢されようとした時期の客観的情勢については前稿で詳述した。そこで、本稿では、その栄進が、なぜ「駿府城」に宛てられたかについて考察してみよう。

そもそも駿府城は、海道一の武将とうたわれた今川義元の居城であった。義元は、延元元年(一三三六)駿河の守護職とな

目次

近世初頭の山崎藩 (二十)	島田 清	一
宍粟の神々 (三)	岩井忠彦	五
山崎町内の地名 (二)	入江静夫	八
老 木	堀口春夫	一三
春の研究旅行記	志水美好	一四
史跡部だより		一五
事務局だより		一六

った今川範政の子孫で、今川氏は、代々ここを居館としていた。天文十八年(一五四九)松平広忠が岡崎城で死んだ。その後嫡子竹千代(後の家康)は人質として駿府に送られた。そして、義元のもとで成長し、弘治二年(一五五六)元服して松平元康と名乗った。永禄三年(一五六一)、義元は大兵をひきいて西上し、元康も一部将として軍にしたがった。しかし、織田信長の奇襲に逢い、義元は、桶狭間にあえない最後を遂げてしまった。

足利氏の一族として、南北朝以来、強大な勢力を誇った今川氏も、義元の討死後は急速に衰えた。殊に、嗣子氏真が暗愚であったため命運を縮め、八年後の永禄十一年、甲斐より攻めこ

んだ武田信玄に滅ぼされた。信玄は、このとき、駿府城を町ぐるみ焼き払い、新に久能山に築城して領国駿河の押さえとした。元亀三年（一五七二）、信玄は、宿望を果たすべく西上の途にのぼった。織田・徳川の聯合軍はこれを三方原に迎え撃つたが大敗し、信玄は進んで野田城を囲んだ。しかし、ここで病を得、天正元年（一五七三）甲斐に帰って没した。五十三歳であった。

信玄没後の武田家は、血気はやる後嗣勝頼と、持重をすすめる宿将達との間に、とかく意見がかみあわなかった。しかし、天正三年、勝頼は大軍をひきいて三河に侵入し、長篠城を囲んだ。信長は進取の気象に富み、何事についても新機軸を出す天才である。このときも鉄砲隊を組織して長篠城救援に向かい、騎兵戦術に徹する武田勢を完膚ないまでに打ち破った。戦史の研究家は、この戦を、中世的戦法が近世的戦法に一変する転廻点に立つものといひ、戦略家としての信長を高く評した。信長、ならびにそのあとを継いだ秀吉が、この鉄砲隊を主とする歩兵部隊の整備につとめ、新しい戦果をつぎつぎひろげていったことは青史に明らかであり、反対に、武田家は、このあと、信長・家康の聯合軍に攻めこまれ、天正十年（一五八二）三月・天目山で滅んだ。

徳川家康は、永禄三年、今川義元の戦死によって解放され、三河国岡崎城にかえった。そして、その後は、織田信長と組んでしだいに勢力を伸ばした。

天正十年、武田勝頼が自刃すると家康は駿河に兵を入れ、武田氏の残兵を追い払った。しかし、武田氏の拠点久能山に拠らず、松平家忠に命じて今川家の駿府城を修築させ、ここに居らせた。

家忠は、三河国深溝に居た松平の一族で、「深溝松平」と呼ぶ。弘治元年（一五五五）

の生れ。天正三年（一五七五）の長篠合戦には早くも功を立てた。のち、各地に転戦したが、築城には特別の才能をもち、同六年、二十三歳のときに遠江国横須賀の砦を築いた。後年、豊臣秀吉が伏見城を築いたとき、家忠も召されて工事を手伝ったが、出来栄えがみごとであるというので、特に、帷子と羽織を賞賜されたことがある。腕前の一斑がわかるのである。家康が特に家忠を擢んで駿府城修築を命じたのは、いうまでもなく家忠の腕前を知っていたからで、家忠は天正十三年に功を終え、翌十四年に入城した。

天正十八年、秀吉は関東の北条氏政を討伐するため、大軍を

食品の店

いまや

さつき通り4丁目
TEL②0169

ひきいて東下した。家康ももちろん軍に従い、戦後は封を関東に移された。そして駿府城は、秀吉の信任あつい中村一氏に与えられた。このとき、一氏の石高は十四万石であった。慶長五年（一六〇〇）上杉景勝は石田三成としめしあわせ、会津に拠って家康が太閤殿下の遺言にそむく十箇条を結問した。家康は、景勝にしばしば西上をすすめたのに聞きいれないばかりか、このような詰問状を送ったのを見て不軌をはかるものとし、討伐のために東下した。いわゆる天下分け目の合戦、関ヶ原役の発端である。



この後の戦況は、多くの人の知るとおりであるため省くが、

戦後の論功行賞で中村一角（一氏の嗣子。一氏は既に没していた）は因幡米子城十七万五千石に封ぜられた。また、駿府城へは、伊豆の韭山より内藤信成が移ってきた。石高は三万石。一氏時代の四分一にも達しない小禄である。信成は、家康の父広忠の子で天文十四年（

一五四五）に生まれた（家康よりは四歳下）。しかし、庶子であったため、家臣内藤清長に養われてその家を継いだ。天正十八年（一五九〇）、北条氏討伐の軍が起ると家康にしたがって出陣し、伊豆の韭山城をおとし入れた。戦後、この功によって韭山城一万石の城主となったが、関ヶ原役後、さらに二万石を増され、駿府城へ移ったのであった。中村一氏時代、十四万石の居城であった駿府城が、急に三万石の内藤信成に与えられたのはどうしたわけであろう？ これは、内藤信成と中村一氏の器量ならびに身分のちがいがからきたものである。また、支配者が「駿府」の地をどのように見るかの相違からもきている。

まず、第一の方から述べると、中村一氏は秀吉の部将として、一手を引受ける実力をもっていた。重要な東海道の一國、駿河の中心部を押さえ、海道ににらみをきかす存在として、秀吉が駿府に封じたのはそのためである。秀吉の内心を、さらに突っこんでのぞいてみると、関東一帯の新封上に就いて、いちだんと強大となった徳川氏の動静を監視する最前線の役を果させるということになるのである。ところが、この一氏が、関ヶ原役勃発と同時に家康に味方したのである。これは、いったい、どうしたわけからであろうか。端的に答をいうと、加藤清正・同嘉明・池田輝政・福島正則・細川忠興・浅野幸長・黒田長政らの武断派諸将がこぞって家康に味方したのと同様、石田三成ならびにその一派、すなわち文治派と呼ばれる武將達への反発である。太閤没後の武断派・文治派の反目、拮抗はまことに激

しく、家康は、この武断派をうまく抱きこんで強盛となったのである。駿府城の中村一氏、掛川城の山内一豊、横須賀城の有馬豊氏、吉田城（後の豊橋城）の池田輝政、岡崎城の田中吉政、清洲城の福島正則（名古屋は、このとき、まだできていなかった）など、関東から京都へのぼる海道筋には、秀吉子飼いの実力武将を並べ、徳川氏の西上を阻止するよう計画していた秀吉であったが、文治派の台頭と権力拡張によって、これら武断派諸将がことごとく家康側に廻ったのは、何とも皮肉な現象であった。

最新型カラー現像機導入 カラープリント・スピード仕上げ



関カ原戦後、内藤信成が駿府城へ三万石が入ってきた意味は、

中村一氏の場合と根本的にちがっている。すなわち、家康の居城江戸と、内裏のある京都とを結ぶ最も重要な海道筋には、家康の手足のごとく動く武将を据えるというのが主旨であった。しかし、小諸侯ばかりを飛び石のごとく置いただけでは力がまとまらぬ。そこで中間に大拠点を設ける

こととし、名古屋城を築いたのである。はじめの家康は、関カ原戦後の論功行賞で、四男忠吉に五十二万石の大封をつけ、清洲城に居らせていた。ところが慶長十二年、忠吉が病死したため、七男義直を後釜に据え、新しく名古屋城を築いて居らせたのである。名古屋と箱根の間に並ぶ諸城は、要するに、海道の治安を厳重にし、糧食を蓄え、人馬輸送を円滑にすることが重要な役目として課せられていたわけである。左に、これら諸侯の一覧表を掲げてみよう。

駿河	沼津	大久保忠佐	二万石
同	駿府	内藤 信成	三万石
同	田中	酒井 忠利	一万石
同	興国寺	天野 康景	一万石
遠江	浜松	松平 忠頼	五万石
同	掛川	松平 定勝	三万石
同	横須賀	松平 忠政	六万石
三河	西尾	本多 康俊	二万石
同	吉田	松平 家清	三万石
同	岡崎	本多 康重	五万石
同	田原	戸田 忠次	一万石
同	挙母	三宅 康貞	一万石
同	作手	松平 忠明	一・七万石

慶長八年（一六〇三）二月、徳川家康は征夷大将軍に任ぜられた。しかし、同十年四月、秀忠に將軍職を譲り、隠居した。このとき、隠居所に選ばれたのが駿府城で、それまでの城主内藤信成は、近江長浜城四万石の主に転出させられた。家康が、なぜ駿府を隠居所にしたかを説明した書物は見かけないが、関東を一步西へ出、京・大阪に接近することで、それだけ、何事でも処理するにも便利だ、と考えたことが第一であろう。大阪の役が起ころるまでの家康の動きをみると、このことがはっきりわかる。北に秀麗な富士山を負い、南に紺碧の駿河湾を望む景勝の地は、これからの十年間、国内政治の中心となり、重要度は極限にまで高められた。駿府城大改修の工事は、これに対応して起こされたものである。

慶長十二年（一六〇七）十二月十七日、幕府は三枝昌吉・山本正成・滝川忠往・佐久間政実・山城忠久らを奉行とし、黒田長政・鍋島勝茂・筒井定次らを助役に命じ、畿内五カ国および美濃・伊勢・近江・丹波・備中の諸大名に、五百石につき三人の役夫を出させ、用材の運搬に当らせた。

工事は、夜を日について進められ、五カ月後の七月、殿館その他ができあがった。しかし、十二月、失火によって本丸を全焼した。家康は、翌十三年正月、再び築城工事を起こし、三月に殿舎復興、八月には七重の大天守を完成した。

次で、慶長十四年、彦坂九兵衛・畦柳寿学を奉行として城下

町がつくられた。いわゆる「駿府九十六カ町」である。歴史家は、この時期を駿府城の黄金時代という。

穴粟の神々（三）

—— 歴史の流れの中で ——

岩井忠彦

これまで二度にわたって、伊和大神の信仰が本来は穴粟に土着したものであったこと、また、この神やその眷族神たち、要するに原始穴粟の神々は、神奈備山や巨岩に憑依・降臨すると信じられてきたことについて述べてきた。今回は、その原始信仰としての伊和大神信仰が、歴史の新たな展開とともに、どのようにして発展してきたかについて、若干の検討を試みたい。

山岳や巨岩に憑依・降臨する神としての伊和大神やその眷族神に対する信仰は、水稻耕

時計・ぬがね・宝石

津村時計店

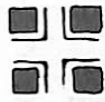
中央通り・TEL ②0355

作の発展とともに、さらに深まったであろう。なぜならば、古代において、稲作に必須の要件である水は、深い山々から供給されたからである。

大河の流れを制禦し、水稲耕作に利用するだけの技術力を持っていなかった当時、稲やかに、しかも絶えることなく水を供給する山々は、人々にとってまさに生活の母であったはずである。その山や、山中の巨石にやどる伊和大神などの神々が稲作の神、田の神として信仰されるに至るのは、自然の流れである。

山岳や巨石の神々は、ここに農耕の神へと転換した。『播磨

漢方薬と食事指導



株式会社

ドラッグストア
ひかりや

山崎町中央通り・TEL②0109

国風土記』に、巨石や山上に降臨し、あるいは石や玉の名を持つ神々の争いが、しばしば川の水の争奪として描かれている事実には、これらの神々の中で二つの性格が融合したことの証明をみることでできよう。たとえば、同書の揖保郡美奈志川条では、伊和大神の子神である石龍比古命とそ

の妹神の石龍比売命の二柱の神が、現龍野市の、中垣内川の水を争った説話が見えるし、また同じく宍粟郡安師里の条には、求婚を拒否した安師比売命に怒った伊和大神が、林田川の上流を大石でせき止めてしまった、という説話が載せられている。

右のような、山の神の農耕神化、あるいは山岳神と農業神の一体化は、現在においてさえも認めることができる。たとえば加東郡社町上鴨川で、新しい年の豊作を祈る新年の神事の対象とされるのは山腹にある巨石である。あるいは、今では農耕の神として信仰される一宮伊和神社の本殿の背後には、今も鶴石が残されている。さらにいえば、中国山地の麓の山村に残るテントバナ(天都花)の風習や、農作物の豊かな稔りを山の神に祈るヤマドッサン(山歳様)の民俗にも、その名残を認めることができる。前者は、田植が始まるころ、山上の神々を村や田に迎えるための行事と考えるべきであろう。こうして、神々は宗教である前に、民俗・風習・行事の中で、人々の生活とともに生き続けたのである。

その後、国家統一の進行と文化交流の活発化により、宍粟の地にも外部からの神々が伝えられ、定着した。『延喜式』巻十神名下にみえる神社の一覧は平安時代における宍粟の神々の姿を伝えるが、それには、宍粟郡内の神社として大一座、小六座計七座の神社名が記されている。大社はいうまでもなく伊和坐大名持御魂神社であり、小社は御形・庭田・雨祈・与比・大倭物代主・邇志の六社である。小社のうち雨祈神社は明らかに雨

の神であり、京都の貴布弥神社からの勧請神と思われる。また、当時の祭神についての確証はないけれども、大倭物代主神社は大和からの勧請神と考えてよい。

これらの新しい神々もまた、やはり旧来の神々同様生活、民俗と一体化した形で受容されたものであろう。雨祈神社のごとき、旱天に雨を乞えば、たちまち雨が降ったという。外来の神といえども、人々の生活に密着してのみ生きることができた。新しい神々には新しい祭祀の方法と時期があったであろうが、それもまた人々の生活や年中行事に組み込まれていったのであろう。神々への信仰が神道として整合性のあるものとされるとき、一種硬直した姿に化してしまうのはごく近年のことであり、神々への信仰は要するに「まつり」であったのである。

最近ではその神道さえも衰え、神々のない「まつり」が各地で生まれてきた。また、古来の信仰を基礎にした「まつり」も観光の対象となるものが増えてきた。その盛行の陰で神々への民俗的なあこがれや信頼、生活習慣と密着した「まつり」への共感が忘れられつつあることを思えば、われわれの生活にとってそれが進歩といえるのか否か、いささかの不安を禁じ得ないのである。

参 考 文 献

- 「風土記」(日本古典文学大系) 秋本吉郎 昭33
 「風土記」(校註日本文学大系) 尾上八郎 解題、昭2
 「風土記」 上田正昭編 昭50

- 「標註播磨風土記」 栗田 寛 文久3
 「標註播磨風土記」 敷田年次 明20
 「播磨風土記物語」 松岡静雄 昭2
 「播磨風土記新考」 井上通泰 昭8(復刻本あり)
 「現代文播磨風土記」 橋本政次 昭34
 「風土記の研究」 秋本吉郎 昭38
 「風土記の世界」 志田諄一 昭54
 「図説播磨国風土記への招待」 浅田芳朗 昭56
 「日本古代の精神」 横田健一 昭44
 「古代播磨の石と石神」 長 洋一 昭54
 「播磨国風土記の成立
 に関する一考察」
 小野田光雄 昭29

株式会社

安井書店

大栗郡山崎町山崎90
 TEL山崎②0700(代)

山崎町内の地名(二)

入江 静夫

会報六〇号で述べました続きを報告します。

五、現在の山崎町内の大字小字の地名

山崎町内の大字小字の地名は次の通りです。一般に使用されているのは大字地番(地番は大字を一連の番号)ですが、登記などに使用されているのは大字、小字、地番となっています。

一、山崎地区

(1) 大字山崎に小字一〇あります。

- 1. 西新町
- 2. 本町
- 3. 山田町
- 4. 福原町
- 5. 北魚町
- 6. 寺町
- 7. 紺屋町
- 8. 伊沢町
- 9. 出水町
- 10. 富士野町

(2) 大字元山崎に小字六あり

- 1. 尼ケハナ
- 2. 東源ケ谷
- 3. 西源ケ谷
- 4. 宮ノ谷
- 5. 上ノ丁
- 6. 上ノ山

(3) 大字上寺に小字二〇あり

- 1. 上垣内
- 2. 深田
- 3. 菰田
- 4. 下ノ田
- 5. 道ノ下
- 6. 鴻ノ口
- 7. 大歳廻り
- 8. 寺垣内
- 9. 下山根
- 10. 下垣内
- 11. 中垣内
- 12. 北垣内
- 13. 清水ノ元
- 14. 岩城
- 15. 水ノ谷
- 16. 北畑
- 17. 北山田
- 18. 雨ケ鼻
- 19. 奥ノ谷
- 20. 小谷口

(4) 大字横須に小字一〇あり

- 1. 日焼田
- 2. 長畑
- 3. 前田
- 4. 西深田
- 5. 山ノ下
- 6. 屋敷
- 7. 上屋敷
- 8. 西ヒヤケ田
- 9. 岩ノ谷
- 10. 笹丸

(5) 大字庄能に小字八あり

- 1. 鴻ノ口
- 2. 鴻野
- 3. 大トシ
- 4. 大水戸
- 5. 中井
- 6. 瀬ノ元
- 7. 荒井
- 8. 川井田

(6) 大字今宿に小字九あり

- 1. 前田
- 2. 東垣内
- 3. 上垣内
- 4. 荒井
- 5. 中筋
- 6. カナギ
- 7. 西垣内
- 8. 鴻野
- 9. 西ノ筋

(7) 大字中広瀬に小字七あり

- 1. 道端
- 2. 稲垣内
- 3. 石田
- 4. 垣内
- 5. 北垣内
- 6. ミゾ端
- 7. 稲垣前

(8) 大字山田に小字九あり

- 1. 築屋敷
- 2. 城下
- 3. 芝花
- 4. ウルシ畑
- 5. ウルシ田
- 6. 横田
- 7. 折上ケ
- 8. 白光田
- 9. 鴻野

(9) 大字鹿澤に小字一〇あり

表装全般 …古いものを大切に…

表具師 松本永春堂

山崎町鹿沢本通り
TEL. 2-0122

美術・工芸・画材

いとう画廊

贈答品に絵画・軸物・版画を!!

出水町通り・☎2-0371

- 1. 志水口
 - 2. 江戸町
 - 3. 東桜町
 - 4. 本多町
 - 5. 三軒町
 - 6. 西桜町
 - 7. 六軒町
 - 8. 通り町
 - 9. 中ノ町
 - 10. 松原町
- (10) 大字門前に小字一五あり

- 1. 下河原
 - 2. 藤木
 - 3. 久保筋
 - 4. 高垣
 - 5. 小井元
 - 6. 大道南
 - 7. 古ヤシキ
 - 8. 的谷
 - 9. 上ノ山
 - 10. 東垣内
 - 11. 東大王寺
 - 12. 西大王寺
 - 13. 西垣内
 - 14. 金井谷
 - 15. 今宮
- (11) 大字加生に小字一七あり

- 1. 葛蒲
- 2. 下夕川
- 3. 井神
- 4. 外輪谷
- 5. 垣内
- 6. 今宮
- 7. 奥ノ谷
- 8. 奥寺
- 9. 障子谷
- 10. 反所
- 11. 反所山
- 12. 障子山
- 13. 上ノ山
- 14. 奥寺山
- 15. 奥谷山
- 16. 今宮山
- 17. 外輪谷山

二、城下地区

- (12) 大字御名に小字九あり

- 1. 鍋ヶ浦
- 2. 井田
- 3. 向川原
- 4. 前田
- 5. 寺ノ前
- 6. 井口
- 7. 野田
- 8. 高下
- 9. 荒神前

- (13) 大字千本屋に小字一〇あり

- 1. 宮ノ段
- 2. 大久保
- 3. 矢寺
- 4. 北垣内
- 5. 裏田
- 6. 女薮
- 7.

- 野田
 - 8. 前田
 - 9. 垣内
 - 10. 川西
- (14) 大字野に小字一一あり

- 1. 川ノ上
 - 2. 東川原
 - 3. 大上戸
 - 4. 居垣内
 - 5. 鳩ノ森
 - 6. 西芝
 - 7. 駒ノ尾
 - 8. 静
 - 9. 塚ノ元
 - 10. 清水
 - 11. 露田
- (15) 大字船元に小字一五あり

- 1. 大畑
- 2. 鞆瀬
- 3. 新田
- 4. 寺前
- 5. 竹ノ内
- 6. 川ノ上
- 7. 樋田
- 8. 畦田
- 9. 古垣内
- 10. 垣内
- 11. 前田
- 12. 上ノ宮
- 13. 町田
- 14. 西垣内
- 15. 松ヶ瀬

- (16) 大字下広瀬に小字六あり
- 1. 上垣内
 - 2. 森谷
 - 3. 西垣内
 - 4. 垣内
 - 5. 西田
 - 6. 前田
- (17) 大字中井に小字九あり

- 1. 城下
 - 2. 寺ノ後
 - 3. 下ヲサ
 - 4. 志水ヶ坪
 - 5. 泉ヶ坪
 - 6. 小牛ヶ坪
 - 7. 鳥田
 - 8. 家ノ前
 - 9. 寺ノ前
- (18) 大字鶴木に小字八あり

- 1. 中井前
 - 2. 東溝端
 - 3. 下荒神
 - 4. 青山
 - 5. 明神ヶ淵
 - 6. 平田
 - 7. 宮ノ前
 - 8. 上土樋
- (19) 大字春安に小字八あり

- 1. 向田
 - 2. 和田川原
 - 3. 上河原
 - 4. 下河原
 - 5. カマダニ
 - 6. 大谷
 - 7. 地像谷
 - 8. 桃木山
- (20) 大字段に小字二三あり

- 1. 志水ノ元
- 2. 柳ヶ坪
- 3. 中井西
- 4. 大ノ馬場
- 5. 十名
- 6. 観音谷
- 7. 山田
- 8. 後
- 9. 中垣内
- 10. 上垣内
- 11. 大谷
- 12. 横ノ谷
- 13. 前垣内
- 14. 村中
- 15. 藪ノ内
- 16. 谷河
- 17. 坂ノ下

- 18. 並
- 19. 山根
- 20. 権現
- 21. 山ノ下
- 22. 亀ヶ尾
- 23. 西山

- 01 大字金谷に小字二〇あり
- 1. 蟻留筋
- 2. 安田筋
- 3. 荒木筋
- 4. 蛭町筋
- 5. 高下
- 6. 博労
- 垣内
- 7. 法師ヶ谷
- 8. 用田通
- 9. 甲樋
- 10. 奥垣内
- 11. タチノ
- 谷
- 12. 国見山
- 13. 湯船口
- 14. 上ノ山
- 15. 堂前
- 16. 袋谷
- 17. 長
- 柄
- 18. 石ヶ谷
- 19. ソタニ
- 20. 亀ノ尾

- 02 大字上比地に小字一六あり
- 1. 北河内
- 2. 宮ノ下
- 3. 大年
- 4. 宮ノ前
- 5. 谷田
- 6. 森ノ上
- 7. 滝ノ下
- 8. 上ノ段
- 9. 池ノ下
- 10. 源ノ段
- 11. 山影
- 12. 神子
- 谷
- 13. 河原
- 14. 石曹谷
- 15. 砂理
- 16. 観音山

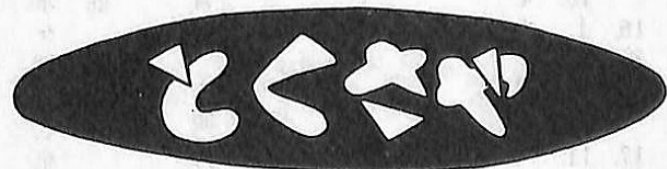
- 03 大字中比地に小字一四あり
- 1. 市ノ坪
- 2. 石田
- 3. 河井
- 4. 向河原
- 5. 大栗
- 6. 大反畑
- 7. 原
- 8. 冷田
- 9. 垣内
- 10. 山根
- 11. 湯谷口
- 12. 堀名垣内
- 13. 上河原
- 14. 湯屋ヶ谷

- 04 大字下比地に小字一七あり
- 1. 西垣内
- 2. 子ノ谷
- 3. 下谷
- 4. 東垣内
- 5. シゲノリ
- 6. 姥
- ヶ瀬
- 7. 三谷川
- 8. 中川
- 9. 中河原
- 10. 上河原
- 11. 比地保キ
- 12. 下河原
- 13. 下野
- 14. 大谷
- 15. 柳タワ
- 16. 古川
- 17. 山ノ下

- 三、戸原地区
- 05 大字川戸に小字が三八あり
- 1. 免戸
- 2. 大フゴ
- 3. 菖蒲
- 4. 菖蒲谷
- 5. 外畑
- 6. 下ノ宮
- 7. 東山
- 8. 奥所垣内
- 9. 合所
- 10. 山根
- 11. 上ノ宮
- 12. 上ノ山
- 13. 蔵ノ下
- 14. マエダ
- 15. 細田
- 16. 深田
- 17. 金山
- 18. 台谷

- 19. 南垣内
- 20. 柱田
- 21. 南場
- 22. 荒堀
- 23. 鳩クロ
- 24. 室原
- 25. 田ノ口
- 26. ニヌ
- 27. 野
- 戸川
- 28. 東配栗
- 29. 西
- 配栗
- 30. 川渡山
- 31. 中河
- 原
- 32. 吉原
- 33. 出口
- 34. 駒ノ浦
- 35. 駒尾
- 36. 崩ノ下
- 37. 西北山
- 38. 東北山
- 06 大字宇原に小字五四あり
- 1. 西井ノ口
- 2. 北右
- 岸
- 3. 南古岸
- 4. 的場
- 5. 観音垣内
- 6. 上河原
- 7. 下河原
- 8. 冷田
- 9. 大才垣内
- 10. 焼ヶ尾
- 11. 大畑
- 12. 南井ノ口
- 13. 東
- 井ノ口
- 14. 堰山
- 15. 北山根
- 16. 北垣内
- 17. 前西垣内
- 18. 西中
- 村畑
- 19. 五反田
- 20. 内ノ坪
- 21. 蔵ノ坪
- 22. 直庵
- 23. 南山
- 24. 寺前
- 25. 成ル田
- 26. セド田
- 27. 細エ田
- 28. 道垣内
- 29. 東中村
- 畑
- 30. 前東垣内
- 31. 禅師口
- 32. 禅師ヶ谷
- 33. 中村垣内
- 34. 大
- 神垣内
- 35. 小路口
- 36. 宮ノ下
- 37. 宮ノ西
- 38. 明石垣内
- 39. ノ
- マ
- 40. 栗穴
- 41. 北雄鳥
- 42. 南雄鳥
- 43. 南垣内
- 44. 段ノ前
- 45. 垣内
- 46. 山神垣内
- 47. 下段垣内
- 48. 引立筋
- 49. 宮ノ本
- 50. 上
- 51. 段垣内
- 52. 段東垣内
- 53. 奥山
- 54. 前谷

創業嘉永元年 きものと共に130余年
高級呉服の専門店



山崎町本町 (さつき通)
☎(07906)2-1680代

外科・内科

山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL②0036

07 大字下宇原に小字六あり

1. 堂ノ西
2. 堂ノ元
3. 下河原
4. 森ノ元
5. 冷田
6. 南山

08 大字須賀沢に小字三七あり

1. 非尻谷
2. 樋ノ本
3. 古町
4. 上六坪
5. 中大坪
6. 桜ノ本
7. 森ノ元
8. 官ノ下
9. 小上
10. 河原谷
11. 土井ノ内
12. 垣内
13. 士林
14. エンニウ
15. 中谷
16. 大谷
17. チコベ
18. 梅ヶ谷
19. 近江ヶ谷
20. 柳ヶ谷
21. 鴻谷
22. 峠ヶ
23. ヒソウ
24. 尾鼻
25. 猪ノ谷
26. 無如谷
27. 才ノ元
28. 石ヶ谷
29. 前田
30. 梨子久保
31. 油谷
32. 油垣内
33. 菖蒲谷
34. 細エケ

郷 35. 森垣内 36. 下河原

原 37. 西谷

09 大字高所に小字一八あり

1. 竹ノ下
2. 西野
3. 下河原
4. 赤土
5. 筋違
6. 塩瀬
7. 長町
8. 石橋
9. 深田
10. 上土井
11. 鍛
12. 石燈山
13. 下土井
14. 杉谷
15. 本谷
16. 浅谷
17. 大平
18. 寺屋敷

00 大字中に小字二三あり

1. 行谷
2. ヒシノ上
3. 寺所
4. 奥河原
5. 山根
6. 下垣内
7. 下河原
8. 蔵ノ本
9. 足原
10. 水通り
11. 丁ノ坪
12. 唐田
13. クボ田
14. 中山
15. 藤
16. 平松
17. 平尾
18. 古屋谷
19. 立茅
20. 小谷
21. 水無
22. 東山
23. 向山

01. 大字三谷に小字一四あり

1. 向山
2. 谷田
3. 垣内
4. 中ノ内
5. 高畑
6. 道上
7. 石ヶ谷
8. 本谷
9. 淡路
10. 下河
11. 明宝寺
12. 菖籠谷
13. 応治ヶ谷
14. 中山

02 大字神谷に小字一二あり

1. 北山
2. 八岡
3. 寺谷
4. 森谷
5. 山田
6. 立花
7. 中所
8. 北所
9. 山陰
10. 平田
11. 戒現行
12. 長柄

03 大字矢原に小字一五あり

1. 月ノ元
2. 官ノ下
3. フケ
4. 垣内
5. 中切
6. 川バタ
7. 悟入堂
8. 上垣内
9. 山根
10. 俵畑
11. 赤ツカ
12. 駒ヶ谷
13. 金山
14. 宮ノ谷
15. 悟入堂西

04 大字岸田に小字一三あり

1. 高地
2. 中川
3. 溝口
4. 当田
5. 松ノ本
6. 築己
7. 東田
8. 下河原
9. 伍入堂
10. 小谷カジ谷
11. 小谷
12. シヤレ
13. カシ谷

05 大字野々に小字二二あり

1. 岨下
2. 深田
3. 土井
4. 中井
5. 細ヶ谷
6. 岸ノ下
7. 池田
8. 大谷
9. 本谷
10. 上埜
11. 大和
12. 上ノ山
13. 天

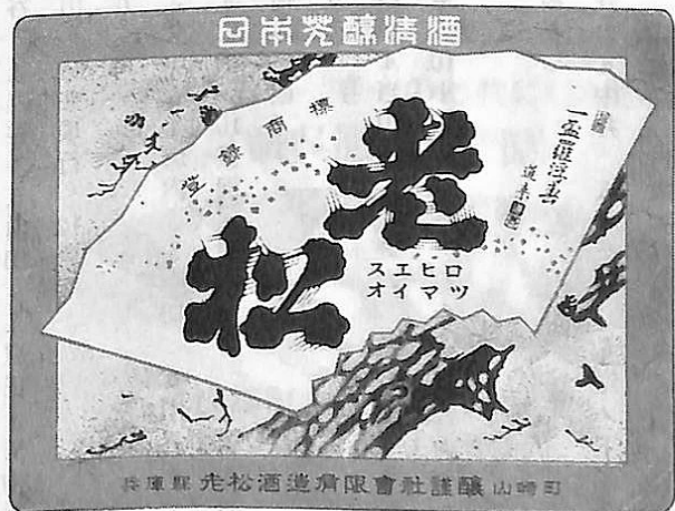
- 神谷 14. 栃谷 15. 塚谷 16. 妙見谷 17. 横谷 18. 寺谷 19. 笹屋
谷 20. 伊王谷 21. カンタラ畑 22. 清水谷

老木

堀口 春夫

私は資料部として最近古字地名の地籍調査をして、古地図の複製を作るべき役を受け、暇をみて町内の路地や道路を散策している。旧町の中心部は各町名が有って現在もそれを使用している。旧町から古くからの字地名と一致しているが町の周辺へ行くといふ可成多くの旧字地名が現在使用されずに忘れ去られようとしている。明治初年の役場の地籍簿を見ても知られない字地名が沢山ある。これを新に復活して覚えようというのである。其の一つに伊沢町の北に茶町と言うのがある。伊沢町の上隣保から大才町元新富座のあたり一帯を言う。東は鴻ノ口見附に至る。古地図によると鴻野口は因幡街道からの町の入口として冊門が設けられ冊の内に柵型の広場があり東の角に番所がある、冊の外は高野で鼻地が広がり附近に木戸口警護の歩屋舗が点在し庄能に通ずる街道筋には茶店か民家がまばらに点在する程度の淋しさである。古くは此の辺一帯を高野と称し次第に鴻野と呼ぶようになったらしい。古老の話によると幕末から明治にかけての頃木戸内の富士野町引屋敷の角に柿の木茶屋と言うのが有って街道往来の人が小休止する茶店であつたらしい。軒先に柿の木

があつたのでそう呼んだらしくどうやら三輪又の軒先に今も有る柿の木がその当時からのものではないだろうか。軒に昔のはえた西条柿の老木で一度は根元近く切られた模様でその跡が節のようになってる。再生したのである。樹齢百年以上は経ているであろう。此の木の生命力に敬服させられる。又柿の生命と言うよりも軒に穴を空けてまで此の老木を保護した家の主人に敬意を表したい。此の柿の木は冊門の関所時代からモーターカーの行き交う現代まで永い間街道筋の歴史を見て来たのである。言葉は持たないまでも手を触れると無言の中に何か語りかけてくる様な気がする。私はふと思ひ出した。時は幕末頃生野義拳の浪士達が四、五人此の木戸を通って西へ落て行った記事を、文久三年十月十四日水戸の浪士前木次郎、関口泰治郎、筑前の藤田四郎、長谷川丹三郎等四、五人の者が生野義拳の直後いち早く落ちのびて宍粟を通つた。前木次郎の後日談によると、生野から千町峠を越えて福中に出福



知を経てようやくにして道らしき道に出た彼等は、里人に聞く
 と此の先は因幡の裏街道であると言う、美玉三平等とは二時間
 程早かったのである。十月十四日朝のこと、急ぎに急いで三津
 々あたりで道行く人に聞くと此の先は本多肥後守一万石の城下
 だと言う、さあ、いよいよ難所に差し加かったと一行は顔を見
 合せ、先づ腹ごしらえなどしながら相談しようと庄能の茶店に
 入って飯を乞うたがすぐには間に合いそうになかった。茶店の
 者に聞くと町の入口に番所があると、若し咎められたら何
 と答えよう、すると筑前藩の藤田四郎が考古学の書籍を所持し
 ていたので「手前等は深山幽谷を踏破して古代よりの地誌、武
 具等を研究して廻る者である」と証拠の書物を見せて弁明する。
 それでもなお厳しく詮議して追捕する時は、此の針次郎が斬死
 への覚悟で闘うから各々方は血路を開いて一刻も早く長州へ落
 ちられよと言う話になった。そこへ美玉三平等より一足先に抜
 けて来た堀六郎が追いつき追手がかゝっている事を知らせたの
 で飯を持つ間もなく店先にあった饅頭を求めて懐にかき込み急
 いで木戸に差し加かった。併し木戸は意外に静かで門の内外は
 箒の目がつく程はき清められ、冊の外に古びた大砲が一门威嚇
 するように設へてあるだけで人の子一人いなかった。番所の幕
 の内にも人の気配はあったがどうやら昼食時と見えて何の咎め
 も無く通り過ぎる事が出来たので一行は気が抜けた様に胸をな
 ぜおろした。町筋は実に物静かで全く平和そのものであったと
 述べている。山崎藩へ生野の騒動が知らされたのは其の後の事

であった。彼等が通過した時は番士達はまだ生野の変を全く知
 らなかったのである。見附門とは言えお上よりの命令が出ない
 限りいちいち通行人のあらためはしなかつた様である。ちなみ
 に藩の覚帳を見ると、十四日の夕刻に生野騒動の知らせがとど
 いている。天領地の方が早く知らされたわけであった。少し足
 の遅れた美玉三平等は不運と言はざるを得ない、併し浪人が四、
 五人町を通った事は後程町年寄より届けられて生野崩れの浪人
 であった事がわかったのである。日誌は其の日の夕刻山崎でも
 警戒令が出されている。此の柿の老木も或いは当時の有様を見
 ていたであろう。木戸の端と言えばまだ清水口見附にもむくの
 大木がある。あれも可成の老木で因幡の殿様の行列なども見た
 事であろう。大名の通過には必ず前もって知らされ決して無礼
 の無き様に触れられ必ず藩主の代官が清水口見附御門の番所の
 前で床几をすえて挨拶を交したと言う。老木は歴史の流れを無
 心に見ている。此の柿の木も明治、大正、昭和と地獄谷の繁盛
 した時代も見て来たに違いない、今は毎日毎日の排気ガスを
 吸って世の中の移り変り様に驚いている事であろう。思えば山
 崎にも老木は少なくなった。泉龍寺の松の大木も昭和十年頃に道
 路開通の為切られた、其後鹿沢の安原邸の松の木も小学校の篠
 見松も松枯れ病で枯れてしまった。篠の丸の一本松も昭和の初
 め頃は高く聳えていて山崎の名物の一つであったが、同じ頃に
 枯れてしまった。随陽寺の樅の木も、校庭の檜の木も今は見る
 事が出来ない。樹木も珍らしく永い樹齡のものは天然記念物と

して文化財の指定を受けるのであるが、自然に枯れるのは仕方無いまでも老木を人の手で切るのには出来るだけ避けたいものである。古地名にしてもそれなりの歴史的由緒があって呼称されていたのであるからこれも又記憶にある限り残して行きたいものである。

故里は遠くにありて思うものと言うが、人は皆遠く離れると何かにつけて故里の景色を懐かしみ臉の裏に浮べるものである。それが久方ぶりに帰って見るとあの路もあの川もみんな変わってあの老木まで無くなったかと、一木一河の変貌にがっかりすることもある。やはり現実に帰って見るより遠く離れていて臉の



裏で追憶を楽しんでいる方がましであったと思うのである。町の進歩とは正反対かも知れないが日本国中画一的な町の景観に成りつつある現代の味気なさに寧ろ開発の遅れた昔のままの観光都市が見なおされ多くの人が訪ねて行くのも思い出に似たような古いイメージの景観を追っている

ではあるまいか。

あの古木、今もあるかと尋ねられ今は無き、松の姿をなつかしむ

春の研修旅行記

志水美好

五月二十二日朝八時、バス三台をつらねて出発した。申込締切の時空席が多すぎたが、安井事務局長の尽力で総員百二十二人という程よい人数となった。洛南の石清水八幡宮、城南宮、法界寺、万福寺と、初めて訪れる方も多かったので、皆さんに喜んでもらえるし有意義な研修の旅ができてよかった。

一、石清水八幡宮 大型のケーブルカーだったので、全員が一緒に乗れて山上へ一気に登ることができた。前もってお願いしていたが、若い神官が詳細な説明をして下さるし記念品まで頂き恐縮した。徳川家光の造営といわれる絢爛豪華な丹塗の社殿（国指定重要文化財）に昇殿参拝もできたのだが、何分にも予定時間が少なすぎたので、説明も途中でことわって早々に下山することになった。ところが、数名の方が帰って来ない為に三十分余も空しく待たされてしまった。こんなことなら予定変更してゆっくり神殿の拝観をするのだったのにと悔まれた。皆に迷惑をかけない様お

互に気をつけたものだと思つて思つた。

二、城南宮 予定より遅れた為、早速昼食をとり充分休む間もなく城南宮に参拝した。神殿は昭和五十三年に平安時代の建築様式で再建されたもので、木の香も匂うばかりの新しく立派なものであった。続いて境内の南にある楽水苑を見学する。約八千平米の敷地に平安・室町・桃山の各時代風の庭園と現代的な洋風を加えた庭園が続いている。一通り見学するだけでも時間がかかるが興趣は尽きなかった。

三、法界寺 閑静な日野里に法界寺を尋ねる。辺鄙な所なのでめったに訪れる機会のない寺である。宇治平等院の鳳凰堂と同時代の建立という阿弥陀堂（国宝）の中で、案内人の上手な説明を聞いて一同感じ入った。内陣の壁画は完全なものとしては、今では日本最古のものである。五月中旬の新聞に、法界寺の内陣の柱に描かれた仏像が赤外線写真で確認された事を報じていたので、特に深い感銘を受けました。

四、万福寺 三百数十年前、中国明の隠元禪師によって開創された中国風の禅寺で、黄檗宗の大本山である。松や楓等の間に立並ぶ中国風の諸堂のたまたま見事です。案内僧の説明を聞いてから思い思いに境内を見学した。山門・大雄宝殿・法堂等十七棟が国指定重要文化財であるというが、短い時間では到底見尽せなくて残念でした。日を改めてゆっくり参拝して有名な普茶料理も賞味したいと思

います。

洛南を中心とした旅行を計画するに当り、見学したらという候補地もありましたが、都合がつかず割愛しました。四ヶ所だけにしぼって結果的には手一杯という所でした。幸い好天気にも恵まれ、全員無事に大体予定の午後六時すぎに帰着いたしました。会員の皆様のご協力を感謝いたします。

史跡部だより

去る七月山崎町上ノの岩上神社に、左の様な史跡の標識が建ちました。これは岩上神社の氏子一同の寄附によるものであります。皆さんとともに厚くお礼を申し上げる次第です。

史跡岩上神社（磐座）

岩上神社には、古くからの伝説もあるが、神の座として考えられた。磐座は風雪に耐えて、農耕や疾病の守り神として、古代のまゝの姿で残っており、庶民に神聖視され常に注連縄がはられている。何時の頃からか、その傍に神殿が造られるようになった。

磐座とは、古代の神々の祀りの跡である。その後時代の変遷を経て、神社のルーツともなり、信仰のかたちも変ったりして今もなおそのまゝの面影をとどめている。

今年五月に、三ヶ所に史跡標識を建てました。岩上神社のを加えて四ヶ所になりました。本年度に建てた標識は左の通り

です。

- 1. 千本屋廃寺跡——千本屋三番道路
- 2. 青木銅鐸出土地——山崎町塩田への道路わき山下氏宅前
- 3. 山崎焼（源ヶ谷焼）窯場跡——山崎町元山崎一三〇番 山本氏宅前

事務局だより

- 一、会報を皆様方の広場とする為、会員の原稿を募集いたします。左記事務所宛にお送り下さい。
- 二、秋季研修旅行のご案内を会報に挿入しております。参加ご希望の方は早目にお申込み下さい。
- 三、二十代、三十代の若い方々も随時ご入会をいただいております。ご親戚、知人の方で未加入の方にご入会をお勧め下さい。

山崎郷土研究会事務局

山崎町

安井清介宅

史稿誌むい

（以下は非常に薄い文字で印刷された本文がほとんど読み取れない状態です。内容は史稿誌に関する記述と見えます。）